

「十人のおとめの譬え」井上隆晶牧師

Iテサロニケ5章1～8節、マタイによる福音書25章1～18節

①【皆が眠り込んでしまう信仰のない、よこしまな時代】

中近東の結婚式は今でも夜に行われます。花婿がまず友人と一緒に花嫁の家まで花嫁を迎えに行きます。花嫁は彼女の友人と共に花婿を待ちます。花婿が到着すると友人たちがともし火を持って花婿を迎え、花嫁と一緒に行列を作って花婿の家に入り、そこで七日間歌や踊りや食事をもって披露宴をします。イエス様の今日の譬え話は、このようなユダヤの結婚式の習慣を背景に語られたものです。

この譬え話の中で、花婿とはキリストのことであり、花嫁は教会を、花嫁の友人である10人のおとめたちとはキリスト教信者を意味しています。このうち5人は賢くてともし火と一緒に油を用意していましたが、5人は愚かでともし火は持っていませんでした。

「花婿が来るのが遅れた」（5節）というのは、キリストの再臨が遅れているということです。パウロは「私たちは、夜にも暗闇にも属していません。」（Iテサロニケ5:4）と言って、この世は「夜」であるといっています。それはまるでこの世が「光である神」のいないかのような世界であり、先が見えないからです。また夜ですからみんな眠くなるのです。聖書では「眠る」というのは信仰がなくなることです。ここでも「皆、眠気がさして寝り込んでしまった。」（5節）とあります。イエス様は「何と信仰のない、よこしまな時代なのか。」（マタイ17:17）と言われましたが、それほどこの世で信じ続けることは難しいのです。悪魔は神の言葉を単なる夢物語のように思わせ、神の言葉よりもこの世の知恵の方が魅力があり、本物であるかのように錯覚させます。この世の情報量が90%、神の国の情報が10%くらいでしょうか。そうやって人はどんどん闇の中に入ってゆき、何も見えなくなるのです。神の国の情報量が足りなさすぎるのです。愚かなことです。

②【愚かなおとめと賢いおとめ】

真夜中に「花婿だ。迎えに出なさい」と叫ぶ声がすると、おとめたちは皆起き上がり、それぞれのともし火を整えました。ところが5人の愚かなおとめたちのともし火が消えかかっていた。そこで他の5人の賢いおとめたちに「油を分けてください。私たちのともし火は消えそうです。」（8節）と頼みますが、賢いおとめたちは「分けてあげられるほどありません。それより店に行って、自分の分を買ってきなさい。」（9節）と答えます。愚かなおとめたちが油を買いに行っている間に花婿が到着し、用意のできている5人の賢いおとめたちと一緒に花婿の家に入り、門は閉じられてしまいます。後から油を買ってやってきた愚かなおとめ

ちが「ご主人様、ご主人様、開けてください。」(11節)といっても、主人は「はっきり言うておく。わたしはお前たちを知らない。」(12節)と言われ、家(神の国)に入ることはできませんでした。私はこの譬え話を読むと不思議で仕方がないのです。油がなければ火は消えてしまいます。なぜこの愚かなおとめたちは油を用意しなかったのでしょうか？

●この教会はランプの多い教会ですから、私はいつもガラスのカップを覗いて蝋燭の量をチェックしています。そして足りないなと思ったら、すぐに仏壇屋に蝋燭を買いに行きます。そうでないと礼拝の時に火が消えてしまい役に立たないからです。また聖餐式が毎週ありますから、ぶどう酒とぶどうジュースをいつも補充しておきます。そうでないと礼拝の時に、足りなかったら聖餐ができないからです。頭の中はいつも礼拝の準備のことでいっぱいです。それと同じように、花婿が遅くなりそうだと分かったなら、なぜ自分のランプの中を覗かなかったのでしょうか。覗いて見れば、油が少ししかないことに気がつくはずでしょう。そしてこれではとても足りないと分かり、準備をするのが普通なのです。

つまり愚かなおとめたちは、自分のともし火をチェックしなかったということです。ともし火とは、10人のおとめが皆、持っていたものですから信仰を意味しています。その信仰を聖書の言葉でチェックするのは、キリストの前に立った時に、自分の信仰で通用するかどうかを考えてみなければなりません。「信仰を持って生きているかどうか自分を反省し、自分を吟味しなさい。」(Ⅱコリント13:5) この愚かなおとめたちは、キリストを目の前に置いて生きていないように感じるのです。神ではなく人を見て信仰している信者とも言えるでしょう。信仰とは、いつも神を目の前に置いて行うものなのです。詩編に「彼らは神を自分の前に置こうとしないのです。」(詩編54:5、86:14)という言葉があります。神に聞いたのか？神を目の前にして本当に生きているのか？問われています。

③【この世で油を用意すること】

では油を用意するということがどういうことでしょうか。ともし火が「信仰」であるならば、油とは「聖霊」を意味していると言えるでしょう。油がなければ火が消えてしまうように、聖霊がなければ、信仰告白は出来ないのです。信仰を持つだけでは駄目なのです。それを確かなものにしなければなりません。天国に行っても、聖霊という油を用意していなければ、信仰というともし火は消えてしまうでしょう。それは地上でも天上でも実は同じなのです。私たちの中から信仰が出たのではなく、神から与えられたものだからです。信仰がタラントなら、それを増やさなければなりません。土に埋めたら消えてしまいます。取り上げられるのです。聖霊は、洗礼を受けた時その人の中に入りますが、ずっと満ちているのではなく、神を求めなければ徐々に減ってゆきます。その人の中に聖霊が満ちているかどうかは、その人の口から出る言葉を聞けば分かります。怒りの言葉や人を非難する言葉が出れば聖霊は住んでいません。喜びと感謝と賛美が出れば聖霊は住んでいるのです。人は自分の内にあるものが口から出るからです。そしてその

聖霊も私が分けてあげることはできないのです。それは個人が、自分で求めなければならぬものなのです。18世紀のサーロフの聖セラフィムはこう書いています。

●キリスト教徒の人生の真の目標は聖霊の獲得にあるのです。…み言葉である神、私たちの主、神人イエス・キリストは私たちの一生を市場にたとえています。地上での私たちの生活を彼は商いと呼んでいます。彼はすべての者たちに「私がやってきて時代を救うまで商いをしなさい。というのも日々は悪なのですから」と言われます。つまり地上のものを手段として天上の善を獲得するため、時を用いなさい。…キリストのためにあなたに最高のものを返してくれるものと取り引きしなさい。神の恵みという資本を集め、それを神の永遠の銀行に収めなさい。

花婿が来てから聖霊という油を買いに行っても手遅れなのです。つまり私たちがこの世に生きている間に、この世で聖霊を用意しなければならないのです。

教会は私たちの目を地から天に、この世の言葉から神の言葉へ、移り変わるものから永遠に残るものに向けさせてくれます。教会に来た時に「天の国の消息」を知り、「天の香り」がしなければなりません。教会にはイコン（聖画像）がたくさんあります。イコンは「天国の窓」と言われています。ここに描かれている人たちは皆、今も天国に生きている人たちです。ですから教会に来ると、天国つまり向こうの世界が見えるのです。私たちは彼らと共に礼拝しているのです。彼らがいる世界が私たちの本国なのです。正面には父と子と聖霊の三位一体の神が玉座に座しており、私たちは地上におりながら天上に立っているかのように祈り、願い、生きるのです。今は大斎レントですから茨の冠をかぶった私たちの王であるキリストが十字架についた聖像が正面にあります。これを見るたびに私の王は、私の罪を負って十字架に登られたのだと思い出さなければなりません。

大斎になると4世紀のシリアの聖エフレムの祈りをします。普通の人には、この世の褒美を求めます。しかしエフレムは「ああ主、王よ、私に自分の罪を見させ、兄弟を裁かない心をお与え下さい」と願います。これは普通の願いではありません。天の国で生きるために必要な心を求めているのです。詩篇を朗読していると、これはイエス様のことだと思う祈りがたくさん出て来ます。私たちはイエス様を賛美し、イエス様を讃えます。詩編はイエス様へのラブレターのようなものです。このお方を愛する思いがどんどん強くなるのです。

アレキサンデル・シュメーマンは「今のクリスチャンたちは、まるでキリストの再臨がないかのように生きている。それが最大の罪である。」と言っています。いつもキリストを目の前に置いて信仰しましょう。キリストの言葉と行いで自分の信仰をチェックしましょう。聖霊という油で満たされて、キリストを賛美し、キリストの王国を見えるようになり、私たちが愛してくださる王であるキリストにお仕えしましょう。